

# 会津若松市における応急仮設住宅の研究と提案

インテリア分野：柴崎ゼミ A22010131 渡邊美央

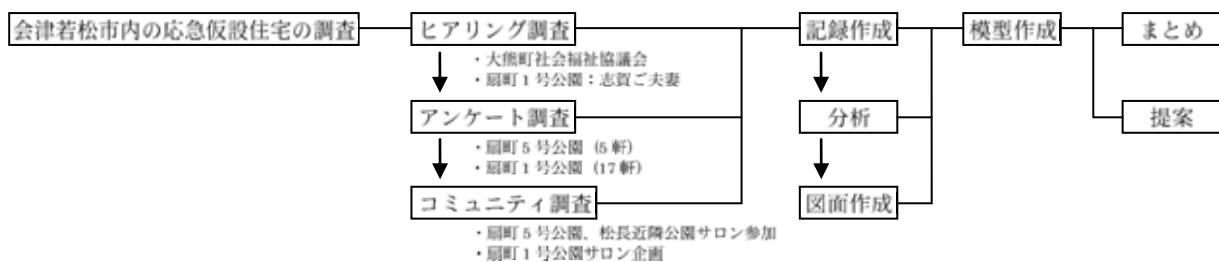
## 研究の背景と目的

昨年の3月11日に起きた東日本大震災は、地震被害や津波、そして、福島県にとって最も大きな被害をもたらした放射能被害など、たくさんの爪痕を残し、多くの人々の生活を奪っていった。住む場所を奪われた多くの人々が、現在応急仮設住宅や借上げアパートなどで生活している。各種メディアでも報道されているように応急仮設住宅では、室内温度や湿度、騒音など居住環境に関する問題が多く取り上げられている。それらの問題はどのような環境で起こっているのだろうか。仮設住宅で生活している人々は実際にはどのような生活を送り、どのようなことを感じているのだろうか。これらのことを調査、分析し問題点を改善していく必要があると考える。

## 研究内容

大熊町から会津若松市に避難し、応急仮設住宅に入居して生活を送っている人々の現状を調査、研究していく。ヒアリング調査やアンケート調査などを行い、生活上での問題点や室内空間の利用方法(空間利用)など、人々の生活という点に重点をおいて調査し、研究を進めていく。そして、現状の問題点の改善方法や住空間でよりよい生活を送るための方法を見出し、そして、将来を見据えた応急仮設住宅の提案を行う。

## 研究方法



## 調査結果

### ■ヒアリング調査

大熊町社会福祉協議会の武内智恵美さんと扇町5号公園や扇町1号公園の仮設住宅に入居されている人々に現在の生活状況などについてのお話を伺い、調査を行った。全体的に収納が少ない、窓が少ないので部屋が暗い、軒が短いので洗濯物が雨に濡れてしまう、駐輪場がないので自転車の置き場に困っている、などといった意見が多数あった。

ヒアリング調査では実際に入居されている方の声を聞くことや実際に仮設住宅の集会所や住居内の様子を見ることができた。



※大熊町社会福祉協議会の武内さんへのヒアリングの様子

### ■アンケート調査

扇町5号公園と扇町1号公園の仮設住宅に入居している人を対象にアンケート調査を行った。項目は記入者自身に関すること・家族構成に関すること・不便に感じていること・1日の過ごし方などについての6項目で行った。また、別紙では室内空間における物品配置調査を行い、居住空間の利用方法を記録に残すとともに生活の状況の調査を行った。

ヒアリング調査と同様に、収納が少ない、段差が多い、窓が少ないので部屋が暗い、などといった意見の他にも、隣の部屋や2・3軒先の部屋の足音が聞こえる、間取りがよくない、などといった意見が目立った。アンケート内で仮設住宅について、満足から不満までを6段階で評価してもらう項目を設け調査を行った。その結果、6割以上の方が少しでも不満を感じているということがわかった。また、アンケートの記入者についてだが、回答者は女性が全体の9割を占めていて、年齢に関しても60歳以上が大半を占めるという結果になった。このことから、年齢層の高い方が多く入居されていることや女性が活動的であると考えられる。居住空間の利用については、一時帰宅等で自宅から持ってきた荷物をおく場所や布団やコタツの置き場所がなく、生活空間が狭くなっているということがわかった。

私自身がアンケート調査を行っていく上で気がついたことがいくつかあった。ひとつは、仮設住宅にはインターホンがなく、ノックするしかない中で中にいる人が来客時に気づきにくいということだ。また、風除室には鍵が取り付けられていなく、簡単に入室できてしまい、人が多く入居しているに関わらず防犯性が低いと感じた。

アンケート調査では、ある程度の期間を設けることによって多くの意見を聞くことやヒアリング調査では聞くことのできない項目を調査すること、室内空間の利用について目視的に調査することやアンケート記入の依頼や回収を通して、アンケート調査について改めて分析することができた。



※アンケート用紙回



※別紙回答例

## ■コミュニティ調査

コミュニティ調査として、扇町5号公園と松長近隣公園サロンへの参加や扇町1号公園でのサロン企画・開催を行った。

サロン参加や企画を通して、仮設住宅での活動は女性が主体になり活動しているところが多いということがわかった。男性の参加者もいたが、男性は女性と比べてサロンや各イベント等への参加もあまり積極的でないということもわかった。参加者は高齢者が多く、若年齢層は集会所の利用自体もあまりないということがわかった。また、各イベントの時にまわりに声をかけたほうが良いと思うが、話したり顔を合わせる機会があまりないので声をかけづらいという意見もあった。企画内容については、女性向けの企画が多く、おしゃべりすることがコミュニティとして確立されていた。みんなで机を囲んで座り、話しをするということや互いの名前と顔をきちんと知ることがとても大切であるということ、身をもって経験することができた。

コミュニティ形成については、入居者自身が主体になってコミュニティ形成をしていくということや入居者同士が声をかけあっていくこと、そして仮設住宅敷地内にある共有スペースの利用方法が重要になってくるのではないかと感じた。



※サロンの様子 上：松長近隣公園  
下：扇町1号公園

## 分析・考察

今回行った調査を通して、現在、仮設住宅で暮らす人々の生活の現状がよくわかった。生活上の問題点については、間取りや収納スペースの確保など、空間構成に関するものが多く、そのことが居住空間の利用に大きく影響しているということがわかった。そして、それらの問題点を改善することがよりよい居住空間の形成や入居者の生活の基盤を築き上げていくことにつながると考えられる。また、仮設住宅の敷地内における配置計画や共有スペースの利用についても改善・考慮すべき点が多数あると考えられる。敷地内の配置計画は仮設住宅敷地内でのコミュニティの確立に多くの影響を及ぼすと考えられるが、各個人のプライバシーの確保や周囲からの視線等のことに関しても配慮していく必要があるとうことがよくわかった。

提案：復興住宅へとつながる応急仮設住宅

## ■展開

仮設住宅として使用された後は2戸をつないで1戸に改修して復興住宅として使用できる木造の仮設住宅を提案する。個人や行政が買い取りできるようにし、行政が買い取った場合には公営住宅としての入居ができるように展開していく。

## ■提案内容

### 1...仮設住宅の敷地内における生活提案（コミュニティ提案）

- ・玄関を向かい合わせることによって入居者同士が顔を合わせる機会が増え、コミュニケーションが図りやすくなる
- ・住戸同士や集会所とをつなぐ通路を設けることによって、そこがコミュニティの場となり、コミュニケーションを誘発する
- ・集会所を建物の中心に置くことによって、居住者にとって集会所が気軽に利用できる場になり、入居者が主体となってコミュニティ形成が行えるようにする
- ・敷地の共有スペースにベンチやテーブル、菜園や花壇などを設けることで、仮設住宅で行われる各イベント等に対応するとともに、室内だけではなく、屋外でもおしゃべりや作業などを行うことができるようになる
- ・敷地内にある共有スペースが住戸と入居者の生活とをつなぐ役割を担うことができるようにする

### 2...住戸における提案

- ・ロフトを設けることや、家族での共有空間と居室を区別することでプライベートを確保できるようにする
- ・サンルームやロフト部分などに窓を多く設けることによって室内により多くの光を取り入れることができるようにする
- ・2戸ずつに分けて建てることで音漏れの防止や復興住宅として改修できる空間を確保する
- ・室内は段差を少なくし、バリアフリーの空間となるようにする

